

名語記の口頭語について

小林 芳 規

目次

- 一、はじめに
- 二、名語記の文体
- 三、引用部分に見られる用語の記述
- 四、説明文の中に現れた口頭語

一、はじめに

日本語の歴史を叙述し説明するに当り、文献に記録された言語が第一次の基本資料となることは言うまでもない。しかし、それが過去の言語の一部に過ぎないのも事実である。文献に記録されなかつた言語の中には、過去の文献の残存することの少い辺陲の地の方言の如く、その過去の言語体系の全容が殆ど欠落しているものもある。

ここに「口頭語」というのは、日常の話し言葉を指し、それ自体が体系を持つ言語である。本質的には音声を媒介とする言葉であるが、過去の言語を資料とする日本語の歴史において、文献資料に基づいてこれを対象とする時には、文字として書き止められたものとなる。それは、「話し言葉」が本質的には音声を媒介とする言語であるが、研究対象としてはそれだけでなく文字化されたものも含み一種の文体として把える立場に通ずる。

日本語の歴史の中で、口頭語の変遷を叙述することは困難が大きい。特に平安鎌倉時代に溯ると、その度合は一層大きくなる。文字によって表現する際には、文章語の言語規範に大きく制約されたからである。ここに文章語というのは、平安時代の和歌を中心に和文を対象として帰納された語法に基づく言語で、明治時代の言文一致体の生ずるまで、文章を書く際の規範となった文章体の言語を指す。文章語の言語規範によって書かれた文献資料が、現存文献の大多数であるために、口頭語の独自の存在を疑うことさえせず、口頭語は文章語と径庭が殆ど無いと考える向きもある。

しかし、辺陲の地の方言に過去の言語を記した文献資料が殆ど欠落しているのと同様に、口頭語も、その音声を媒介とするという性格上、過去のそれが文献資料として残り難い、という事情を考慮する必要がある。そういう中で、過去の方言が、偶々断片的ではあるものの、文献に書き止められて残ったように、口頭語も、文章語を規範とした文献の中に、種々の形で書き止められることがあった。そのような文献資料を手掛りとして、ここでは口頭語の体系 x が存したという仮説を検証すべく努めてみようと思う。

この意図のもとに、筆者は、別に小考を試みて来た。即ち、

1、「鎌倉時代語研究の課題」⁽¹⁾において、先ず、鎌倉時代に新生したとされる副助詞「バシ」について鎌倉時代の諸文献を検討して、「日常の口頭語が強く反映する場面に現れる」ことを指摘し、そのような場面では、更級日記の初瀬詣の「あやしげなる下衆の小家」の「あやしのをのこ」の発話中にも見られるように平安時代にも存したと述べ、類似の語として、代名詞第二人称の「オレ」を指摘し、更には願望の助動詞「タシ」や連体形終止、係結の呼応の乱れなども、鎌倉時代だけでなく、平安時代の和文や漢文訓読文という特殊な文章語の基底にあって用いられていた口頭語との関連で把えようとした。

2、次いで、「鎌倉時代の口頭語の研究資料について」⁽²⁾では、副助詞「バシ」、願望の助動詞「タシ」を始め、推量の助動詞「ムズ」、持ちかけの間投助詞「ナ」、禁止の助詞「ソ」、完了の助動詞「タ」、推量の助動詞「ウ」、打消の助動詞

「ナムジ」、代名詞「ドコ」、連語の「コサンナレ・コサンメレ」「サルニテモ」「ナニシニ」の助詞・助動詞・連語を群として扱え、先ずこれらの語群が、当時の日常の口頭語を反映しているとされる延慶本平家物語の会話文に偏って現れることを指摘した上で、これらの語群が文章の基調となっている文献を院政鎌倉時代から取出して、その例として草案集・諸事表白・却癡忘記・光言句義釈聴集記・仏光観聞書・梁塵秘抄卷二が口頭語資料に挙げられるとした。これらは、片仮名文では法会に際しての談話ノートであったり、日常談話の聞書などである。梁塵秘抄については後述のようである。

3、更に、平安鎌倉時代の和化漢文の中にも、口頭語資料と認定しうる文献の存することを、右の語群を視野に入れつつ、更に音声・音韻の事項にも拡張、これに重点をおいて考察した。⁽³⁾

4、これらを受けて、平仮名文の梁塵秘抄と同口伝集を対象として、その用語を、文法・音韻・語彙の各面にわたって検討し、当時の口頭語の体系の一面を窺おうとしたのが、「梁塵秘抄の本文と用語」⁽⁴⁾である。これには、「梁塵秘抄口頭語集覧」⁽⁵⁾（百十項目、四二六〜四七四頁）が基礎となっている。梁塵秘抄は卷一の二十一首が室町時代、卷二が江戸時代、口伝集卷十が南北朝時代の康暦元年（一三七九）の書写（親本は鎌倉時代の寛元四年（一二四六）写本）であり、特に歌謡には多くの誤写を含む本文状況の悪い文献であるが、「誤写類型」の視点を導入して誤写を正すことを通じて撰述時の言葉に還元することに努めた。その上で、歌謡は、当時の全国に流行した今様を集めているから、その用語には当時の庶民の日常の言葉が現れると考えられ、そこから当時の口頭語の体系を窺おうと試みたのである。「梁塵秘抄口頭語集覧」には、院政鎌倉時代の口頭語を含む諸文献を援用したが、その中で、名語記は、最も有効な文献であった。

本稿で、名語記を直接の対象として取上げたのは、「梁塵秘抄口頭語集覧」作成の作業が契機となっている。この作業では、名語記の辞書としての掲出項目に重点をおいて、関連する口頭語の資料を拾い出したのであったが、この作業を

終えた段階では、名語記の全文を対象として、口頭語資料としての観点から、やや詳しく読んでみようと思図するようになったのである。

名語記の用語の性格については、既に岡田希雄氏の言及がある。⁽⁶⁾ここでは、「其れらの語彙の中に、珍しいものが多い」とし、その性質について「大体が古語であるとは認められないものにして、つまり本書が出来た文永・建治の頃に普通に都にて行はれて居たものと認められるものどもである。云ひ換へれば、鎌倉時代語と認められる語彙である」と述べている。ここにいう「鎌倉時代語」が如何なる内容のものであるか、定義が無いので詳かではなく、取上げた語群も恣意的のようである。本稿では、口頭語資料という観点からこれを体系的に把えて、資料価値の再発見をして見ようと思う。尚、「名語記」の原本については調査の機が得られないので、止むなく、勉強社刊北野克氏写の本文によった。

二、名語記の文体

名語記十帖（現存本は巻第二より巻第十に至る九帖）は、岡田希雄氏が「語原辞書」と紹介された如く、語源説明を主とする国語辞書であり、語を第二音節までイロハ順に掲げ、問答体の形式で、漢字片仮名交り文で記している。語源説明の方法と内容とは問題があるものの、撰述当時の用語が豊富に収められている。

名語記の文体基調は、当時の文章語の規範によつて見られる。まず、巻二冒頭にある自序の文章を見るに、左のようである。冒頭と末尾とを引用する。

一字名語 イロハノ四十七言コレヲツクセリ 右コノ書ノ大キナルオモムキハ釈尊ノ遺教ニライテ宗々マチノナレトモ頭教ハ法門ノ奥義ヲノミ談シテ文字ノ沙汰ニト、コホラス 大日如来ノ真言教ニツキテ悉曇ノ一道アリ ヨク 梵字ノ名義ヲ流通シテ反音ノ肝心ヲシラシメタリ 大國ノ先徳カノ道ニ達シテ頭密ノ聖教ヲ漢字ニ翻訳セリ 日本ノ祖師タチモ入唐ノトキ直ニ正説ヲウケナラハレテ根性ヲノミ明敏ナリシカハ禽獸ノ音ヲキ、テモカレラカ所存ヲ察シ 風波ノヒ、キニツケ

テモ宮徴ノミナモトヲサトラレケリ (中略)

実ニモイニシヘヨリ イマタナキコトヲハシメテツラネラケル今案ノトカノカレカタキユヘニ ラノツカラマタムカシ
ニモカツテキカサリツルヲシヘナリトテ ユルシ 感スル仁ニアヘラハマユヲヒラクヘシ アヤマリヲナタムルヒロキナ
サケヲラモクスヘキユヘニヨリテ オモヒウルニシタカヒテ 一二両字カツくモテ類聚ス 三四五言コレニ准シテヨ
ロシクシリヌヘシ トキニ文永五年^{辰戊} 月 日一部六卷勘注功ヲラフ イフコトシカナリ

一見して、漢文訓読語を多く用い、文末が平安時代語に通ずる文章語の規範によつてゐることが分る。

次いで「一字名語」の「イ」から始まる、語源辞書の本文となる。その形式は問答体によつてゐる。例えば次のようである。

〇二

問 イロアカキ物ラニトナツク如何 答 ニハ丹也 ネチヲ反せハ 二也 熱也 アツキ物ハアカキ色ニカタトレリ 火
モアカシ 日モアカシ 血モアカシ コノ丹ヲ訓ニハニトイヒ 音ニヨミテハ タムトイヘル 絵ノ具ニハ各別ノ物也
尋テイハク ニハネチノ反 ネチノ物ハソノイロアカシト尺セラレタリ シカルヲ アラニヨシナラトツ、クル和歌ノ詞
アリ ソノアラニトハ昔 奈良坂ニメテタキ紺青緑青アリケルニヨリテ アラニヨシナラトイヘリト申セル歟 紺青モニ
ノ名ヲツケリ如何 ソレハシカナリ オナシク ニナレトモ アラニトイヘルハスナハチ非分ノ義也 (以下略)

この説明文も、漢文訓読語を用い、文末が平安時代語に通ずる文章語の規範で表されていて、前掲の自序の文体に通ずるものである。

所が、この問答体の文章を仔細に見ると、「…トイヘル」で引用する形式が、全巻にわたつて多数見られる。例えば次のようである。(引用部分に私に「」を付す)

a. 下藤ノ「コレミロ」トイヘル 如何 答 別ノ心ハアラサルヘシ ミヨヲ「ミロ」トイヒ セヨヲ「セロ」トイヘ

ル 田舎ノ詞也(卷六、五一オ)

b. 下人ニ物イヒキカセムトスル時 「ヨナ」トイヘル心如何 答(略) 下人ナトニツフサニヒフクメムトスルニハ「ヨナ」トイヘル也(卷四、四二オ)

c. クサヒラ如何 茸也(略) 又茸ヲ鎮西ナトニハ「ナ。ハ」トイヘリ(卷九、四六ウ)

d. 文永ノ年号サタメラレケル時 見物ノ人申セリケリ「文ハホシノヨミアリ 文永ヲホシナカシトヨマレタリ ホシノナカキハ、彗星ニアタレリ 彗星イテナムス」ト申シケルヲカタヘノ人キ、テ披露セリキ(卷六、九〇オ)

e. 人ヲノル詞ニ「シヤツラシヤ身 シヤソクヒ」ナトイヘル シヤ如何(卷六、六八ウ)

f. 他人ニムケテ「ミタ歟 キ、タ歟」ナトイヘル タ如何(卷二、二七ウ)

a は下臈の発言、b は下臈に向つて発言する場合の語であり、その、a は周知の命令形に「―ロ」を用いる用語、b は先掲の拙稿で口頭語群の一つとして取上げた、持ちかけの間投助詞「ナ」を用いた例である。c は鎮西という地方の方言を取上げている。d は「見物ノ人」の発言であり、素姓は詳かでない。e、f も発言者の素姓は未詳であるが、「シヤ」は中世の俗語とされ、完了の「タ」も口頭語群の一である。このように、発言者の階層や、地方語などの分るものもあるが、その未詳のものも少なくはない。しかし、そこに引用された語群は、当時の口頭語と見られるものである。

三、引用部分に見られる用語の記述

このような「トイヘル」⁽⁷⁾で引用された語を全巻から抽出して、整理して示すことにする。記述に当り、構成は、「梁塵秘抄の本文と用語」のうちの「梁塵秘抄の口頭語」⁽⁸⁾の組織により、大きくは(一)文法、(二)音韻(国語音)、(三)音韻(漢字音)、(四)語彙に分け、それぞれに細項目を立てて示す。

(一) 文法

1 代名詞

指示代名詞は、コ・ソ・ア・ドが使われ、次のように帰納される。

近称	コノ	事物・人	場	方
中称	ソノ		所	角
遠称	アノ	コレ	ココ	コチ
不定称		ソレ	ソコ	ソチ
		アレ	アソコ	アチ・アナタ
		ドレ	ドコ	ドチ

ア系の例を挙げる。

〔アノ〕 小法師カ申シケルハ「ヤ御房くアノセヒカ御房ヲツヒツキ法師ト申候ソヤ」ト申ケレハ「ヨモヤレ ワレヲハイ

ハシ ワ小法師ヲソイフラム」ト論シケレハ（巻六、六三〇ウ）

〔アレ〕 「アノ アチ アナタ アレ」ナト物ヲサシツメテイヘル ア如何（巻二、五三オ）

〔アソコ〕 所ヲサシテイフ詞ニ「アソコ」如何（巻八、六九ウ）

〔アチ〕 「アチユク」ニ対シテ「コチク」トイヘル ク如何 クハ来也（巻二、四〇ウ）

〔アナタ〕 「アノ アチ アナタ アレ」ナト物ヲサシツメテイヘル ア如何（巻二、五三オ）

ド系の例は次のようである。

〔ドレ〕 不審スル詞ニ「ト・レソ」トイヘル トレ如何 答 イツレヲイラ略シテ「ト・レ」トハイヘルニアタレリ（巻

三、二五ウ）

〔ドコ〕 「トコソ」ト在所ヲタツヌル如何 イトコノイライヒケテル也（巻三、二八オ）

名語記の口頭語について

「ドチ」人ヲ「トチユクソ」トトヘル トチ如何(卷三、二二三ウ)

これによると、既に現代語と同じコソアド体系が成っていて、口頭語ではこれを用いたと見られる。人称代名詞には、二人称に「オレ」がある。

「オレ」下臈ヲ「オレカ」トイヘリ如何 答 ヲレハラノレ也(卷三、四九オ)

2 動詞の活用

下一段活用動詞の「ケル」がある。

「ケル(蹴)」「鞠ヲケル」トイヘル ケ如何 ケハ蹴也 クエルトイフヘキ クエヲ反セハ ケナリ ケルトイハムモタカハサルヘシ(卷二、四五オ)

名語記には「クエルトイフヘキ」のように、「トイフベキヲ」の表現が、引用の「トイヘル」に対して一方にある。これは、文章語の規範的表現を指すと見られる。従つて「クエル」が文章語であるのに対して、口頭語では「ケル」であったことを示していると考えられる。

3 活用形の用法

(1) 連体形終止

連体形が、係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」の結びでもなく、疑問語「たれ」「いづれ」等の結びでもなく、主格助詞「の」「が」に應ずる述語の結びでもなくて、終止用法となる例がある。

「アル」家ノソホチャフレタルヲ「ハラ／＼トアル」トイヘル如何(卷三、五オ)

「ニタ／＼トアル」トイヘル ニタ如何(卷三、一六ウ)

ネハキ物ヲ「ニヤ／＼トアル」トイヘルニヤ如何(卷三、一九ウ)

コマカナル物ノサキヲ「ワラ／＼トアル」トイヘル ワラ如何(卷四、四ウ)

ナニ事ニモ「エムアルナシ」トイヘル エム如何 答縁也(巻五、九〇オ)
サハヤカナル物ヲ「キハトアル」トイヘル キハ如何(巻六、三一ウ)

人ノ勢ノ大キナルヲモ「ユクくトアル」トイヘル コレ也(巻六、四五ウ)
ナヘタル物ヲ「クタラトアル」トイヘリ如何(巻八、二四ウ)

「スル」 ネメトハ早且ノイマタ目モサメヌニイソキオキナトシタル時 「ネメスルく」トイヘル事歟(巻四、八九オ)

「ミスル」 又「ケムコラミスル」トイヘルハ賢愚也(巻五、六〇ウ)

「ヅル(出)」 「朝日ノツルくトイツ」ナトイヘル ツル如何 コレハ出ヲツトモツルトモヨメリ(巻四、七四オ)

「タル」 「人ノシナラフ トリタル」トイヘル シナラ如何(巻八、一一八ウ)

「ミタル キハタル」ナトイヘル タル如何(巻四、五〇オ)

「ナル」 ウスキ物ヲ「シヤノ様ナル」トイヘル シヤ如何 シヤハ紗トカケリ キハメテウスキ絹ノ名ナルヘシ(巻六、六八ウ)

のようで、動詞「アル」「スル」「見スル」「出ル」と、助動詞「タル」「ナル」に見られる。

(2) 命令形の「〜ロ」

下臈ノ「コレミロ」トイヘル 如何 答 別ノ心ハアラサルヘシ ミヨヲ「ミロ」トイヒ セヨヲ「セロ」トイヘル 田舎ノ詞也(巻六、五一オ)

セトイフ心ヲ「セロ」トイヘリ如何 答セロハ田舎ノ詞也(巻六、九二ウ)

現代語の関東地方方言の鎌倉時代における用例として良く知られる所であるが、これも口頭語として引用された箇所に出て来る語である。ここでは「下臈」の発言とし、「田舎ノ詞」と説いている。

4 形容詞の用法

(1) 語幹用法

形容詞が、活用語尾を附けずに語幹だけで、述語等に用いられている。

不浄ナル物ヲ「キタナ」トイヘル如何(巻八、九五オ)

カタヤストイヘル心モ片安也 ミナ大事ニモナクテ 一方ノタスカル スチアルヲ「カタヤス」トハイヘルニヤ(巻二、

二三ウ)

ウシトイヘル詞ヲ「アナウヤ ウイコトカナ」ナトイヘル ウ如何(巻二、三六オ)

身ノハタエノ「カユカユシ」トイヘル カユ如何 カユハ癢也 痒也(巻四、三〇オ)

助動詞の形容詞型活用をする「タシ」にも「詞ニミタヤ キ、タヤトネカフ心ノタヤ」(巻四、五四ウ)とある。

(2) 終止形の「〜イ」

詞ニ「トイ ヲソイ」トイヘル トイ如何 答 トシヲトイトイヘル也 速疾ノ義也(巻三、二二ウ)

現代語の終止形「〜イ」と同じ用法である。

(3) 「カ語尾

領状ノ詞ニ「ヨカ」トコトウクル如何(巻四、四〇オ)

「カ」語尾は、現代の九州方言に見られる用法であるが、「領状ノ詞」に用いたとあるのによると、鎌倉時代の当時は、方言だけでなく、京畿の口頭語でも用いられたことが考えられる。

5 助動詞

推量の「ムズ」、完了の「タ」、願望の「タシ」と「死ニニケリ」の用法がある。

(1) 推量の「ムズ」

「ムズ」は、「ムトス」に対して、位相の上で使われる場に顕著な相違があり、「話ことばに用ゐる」「特にくだきたいひ

方に用ゐる」と説かれて来た語であり、要するに当時の口頭語であつたと考えられる。次の例がある。

コノ事ハ「ハトキコエナムスナ」トイヘル ハ如何 ホカノ反ハ ハ也 外聞エナムストイヘル心也(卷二、七ウ)

〔略〕 彗星イテナムス」ト申シケルラカタヘノ人キ、テ披露セリキ(卷六、九〇オ)

(2) 完了の「タ」

「タリ」の変化した「タ」が次のようにある。

他人ニムケテ「ミタ歟 キ、タ歟」トイヘル タ如何 コレハツヤノ反ノタ也 ミツヤ キ、ツヤノ義也(卷二、二七ウ)

「ミタキ、タ」トイヘル ミタ如何 ミハ見也(卷六、五二ウ)

(3) 願望の「タシ」

「タシ」は、鎌倉時代に生まれた¹⁰として、千五百番歌合の定家の判詞「俗人の語に聞く」と併せて説かれて来た。「ムズ」「タ」と共に口頭語資料を認定する語群の一つとして取上げられた語である。次の例がある。

詞ニ「ミタク キ、タク」トイヘル タク如何(卷四、五四ウ)

(4) 「死ニケリ」(ナ変動詞に完了の助動詞又が附属)

ナ行変格活用動詞「死ヌ」に、同じ活用で語源を同じくするとされる完了の助動詞「ヌ」が附く用法は、文章語の規範では違例となるが、「トイヘル」の引用の中に次の例がある。

〔略〕 蛇ノ尾ヲ鼻ノ中ヘサシイレタリケルニヨリテソノ人シニ、ケリ」ト申セルコトアル歟(卷九、五五オ)

6 助詞

副助詞「バシ」、禁止の「ソ」、終助詞「ヤラム」、間投助詞「ナ(持ちかけ)」、並列の「ヤ」の省略がある。

(1) 副助詞「バシ」

副助詞「バシ」が口頭語であったことは前述の通りである。次の例がある。

「コ、ニハシサハルナ」トイヘル義歟（巻二、五〇オ）

「コレハシミルナ キクナ」ナト禁制スルヨシノナ如何（巻二、三四ウ）

(2) 禁止の終助詞「ソ」

禁止を表す「ナ…ソ」の「ナ」を表現せず、「ソ」のみで禁止を表す例が次のようにある。

「コレナミソ キ、ソ」ナトイヘル ソ如何 セソヲ反セハソナリ 不為ノ心也（巻二、二九ウ）

(3) 終助詞「ヤラム」

文末にあつて、不確実な推測を表す「ヤラム」が次のようにある。

「アルヤラム ナキヤラム タレヤラム」ナトイヘル ヤラム如何 答 ヤラム不審スル詞也（巻八、三四ウ）

(4) 持ちかけの間投助詞「ナ」

聞き手に対して発言の意図や内容を持ちかけ訴えかける「ナ」が次のようにある。

下人ニ物イヒキカセムトスル時「ヨナ」トイヘル心如何 答（略）下人ナトニツフサニイヒフクメムトスルニハ「ヨナ」

トイヘル也（巻四、四二オ）

コノ事ハ「ハトキコエナムスナ」トイヘル ハ如何（略）外聞エナムストイヘル心也（巻二、七ウ）

(5) 並列の「ヤ」の省略

「ヤ」は並列した語に附いて、「柚ゆや梨なしなどを」（蜻蛉日記）のように用いられるが、最後の「ヤ」を省略した用法がある。

「鳥トヤ虫ナトノスタク」トイヘル心如何（巻八、一四七オ）

現代語の口頭語に見られる用法に通ずる。

7 接頭辞「シヤ」

人ヲノル詞ニ「シヤツラシヤ身 シヤソクヒ」ナトイヘル シヤ如何(卷六、六八ウ)

この接頭辞「シヤ」は、人を卑しめのものしる意を添え、又、中世の文献における現れ方から見ると、当時の口頭語と考えられる。

(二) 音韻(国語音)

国語音では、母音に関する現象が多く見られる。

1 母音の交替

母音oがuに交替した例がある。

ヨハキヲ「ユハ」トイヘリ 如何 答弱也(卷六、四一ウ)

2 語頭の狭母音音節の脱落

語頭の狭母音iの脱落した語が次のようにある。

「デ(出)」出ノ字ヲ「テ」トハカリイヘリ如何 イテノイライヒカクセルナリ(卷二、五二オ)

ウセタルモノ、「テキタル」ナトイヘル テキ如何 テキハイテキ也 出来ナリ(卷五、九四オ)

有馬以下所ミノ温泉ヲ「テユ」トイヘリ如何 答イテユ也 出湯也(卷五、九四オ)

出ノイツノイライハスシテ「ツ」トイヘルカコトシ イテヲハ「テ」トイヘルモ同躰ノ事ナリ(卷二、四三オ)

出ハイツ也 タ、「ツル」トハカリイヘリ如何 イツノイライハサルコト例オホキ也(卷四、七四ウ)

「ツラ(何)」目ニミエヌ物ヲ「ツ。ラ」トイヘル詞如何 イツラノイヲ略セル也(卷四、七八オ)

「ダス(出)」出ハイタス也 ソレヲタ、「タス」トイヘリ如何 答 イヲ略シテ「タス」トイヘル也(卷四、六〇ウ)

「ダク(抱)」衣裳ニ「ソテタキ」トイヘル。タキ如何 タキハ前ノ心イタキ抱ノ字ニアタレリ(卷四、五七ウ)

3 連母音による母音 i・e の脱落

語中に i の連続した結果、その一つの脱落した例に、

「ヒツ(秀)」「ヒテタリ」トイヘル ヒツ如何 ヒツハ秀也(略) 又人モ群ニヌクルヲハ「ヒツ」トイヘリ穂等ニ准シテ
イヘル也(巻六、八一ウ)

があり、複合語の中で連母音の e の脱落した例に、

「イハルシ(家主) 亭主ヲ「イハルシ」トイヘル如何 コレハイエアルシ也(巻九、一ウ)
がある。

4 語頭の o の脱落

「ワス(坐) 人ノキタルヲ「コチワス」トイヘル如何 ワスハ坐也(巻四、八オ)

「ワス」は「オワス」の o の脱落した語である。

以上は母音に関する事象であるが、子音にも注意すべき事象がある。

5 子音 k と s の交替

「キト↓スト」 下臈ノ「キト」、イフヘキヲ「スト」、イヘル如何(巻六、九八オ)

子音 k と s と交替し更に母音も交替した例か。

(三) 音韻(漢字音)

漢字音では、オ段長音に関する現象が注目される。オ段長音は、母音の重なりを避けるという日本語の性格によって生じ、院政期以降には一般的な現象になっていた。これに伴い、口頭語では、新たな事象が生じたらしい。一つは、オ段長音の合音の短呼であり、もう一つは、オ段拗長音のウ段長音化である。

1 オ段長音の合音の短呼

「コ(鉤)」 ミスラマキアケテ モタスル物ヲコトナツク如何 御簾ノコハ鉤也 コウトイフヘキヲ「コ」トイヘル也(巻二、四九ウ)

「ト(頭) クルメク」 カシラナトツヨクウタレテ 「トクルメク」トイヘル ト如何(巻二、一三ウ)

「トヒヤウシ(銅拍子)」 ツ、ミ トヒヤウシノト如何(略) 字ニハ銅拍子 頓拍子ナトカケリ(巻二、一四オ)

「ヲ(応)」 女人ヲヨフニ「ヲ」トコタフル如何(略) 又應ノ字ノ音ヲラウトトナフル歟(略) 音ニハヨウトラウトナレハ

ヲトイフ歟 男子ヲヨフ時ニ「ヨ」トイラフルハ 應ノ字ノヨウノ音ナルヘシ(巻二、二〇ウ)

「トクルメク」「トヒヤウシ」「ヲ」には、語源の解釈に問題があるが、このような解釈の背景には、「トウ(頭)↓ト」「ドウ(銅)↓ド」「ラウ(応)↓ヲ」という短呼現象を踏まえていたことが分る。

尚、「ザコ(雑喉)」については「語彙」の項を参照。

2 オ段拗長音をウ段長音に発音

「テウ(チヨウ) ↓チウ」 「溝ヲチウトコヘヨ」ナトイヘル チウ如何 コレハ超ノ字ノ音ヲテウトイヘルヲチウトイヒナ

セル也(巻三、三五オ)

この例は、オ段拗長音をウ段長音に発音する現象の鎌倉時代の例として注目されたものであるが、これも「トイヘル」で引用された口頭語の例である。¹²⁾

オ段長音に関する事象以外では、次の現象がある。

3 母音oとuの交替

母音oがuに交替した例として、

「クハク(琥珀)」 「クハクイロ」トイヘル クハク如何 クハク 珠也 琥珀トカケリ(巻八、二二オ)

があり、母音uがoに交替した例に、

「ケムコ（賢愚）」又「ケムコヲミスル」トイヘル賢愚也（巻五、六〇ウ）

がある。「賢愚」の字を宛てる所にこの母音交替の意識を読みとることが出来る。

（四）語彙

「テテ（父）」父ハチ、也 ソレヲ「テ、」トイヘル如何（巻五、九三ウ）

「テテ」は「父」と同義であるが、平安時代の和文では、多くは幼児の会話や発言の中で用いられ、又、父親に対して親愛を籠めた幼児的な立場から用いている。仮名消息の用語に見られるものも、息子や息子の立場に立つての場で使われる。幼児語に出るもので、口頭語として日常的に用いられたものであろう。

「ザコ（雑喉）」チヒサキ魚トモヲ「サコ」トイヘル如何 雑魚ヲ「サコ」トイヘル也（巻六、二五ウ）

梁塵秘抄には、「ざこ」（三九六、四四一）の他に、「ざごう」（三九五）の語形がある。文明本節用集「雑喉コ小魚」はじめ伊京集、易林本などの節用集、下学集諸本も「雑喉」の字を用い、実隆公記・看聞日記でも「雑喉」とある。「雑喉」から「ザコ」が転化したものとすれば、梁塵秘抄の「ざごう」は「ざこ」に転化する一つ前の形と見られる。「雑喉」が語源を示すとすれば、これも才段長音の合音が短音化した例となる。いづれにせよ、当時の口頭語であったであろう。

「タブ（賜）」人ノ持タル物ヲ所望スル詞ニ「タ。へ」トイヘル如何（巻四、四八ウ）

人ノ「物ヲタブ」トイヘル如何 タブハ給也 賜也（巻四、五六才）

梁塵秘抄に、「羽賜はたべ若王子」（二五八）、補助動詞として「此この着きたる紺こんの狩襖かりあせに女むすめ換かへ給たべ」（四七三）等がある。石山寺蔵虚空蔵菩薩念誦次第紙背仮名消息はじめ、平安時代の消息や讓状などに屢々用いられ、和文の会話文、平安初期訓点資料に見られるのによると、口頭語の要素を色濃く見せている。

「スハ（感動詞）」人ニ物ヲアタフル詞ニ「スハ」トイヘル如何（巻六、九七ウ）

相手に注意を促して呼ぶ語の「スハ」は、古典では、更級日記や平家物語(覚一本)の例のように、会話文(思惟文も含む)に用いられている。梁塵秘抄にも「すは走り出で」(三五二)のようにある。当時の口頭語と見られる。

他の、口頭語と見られる一般語彙を挙げる。

「ア(感動詞)」 女人ニ物ライヒフクムル返事ニ「ア」トコタフル ア如何(巻二、五三オ)

「ヤ(感動詞)」 人ヲヨヒ、ムル詞ニ「ヤ」トイヘル如何(略) キカスカホナルヲ ツフサニイヒキカセムトテ「ヤ」ト

ハイフ也(巻二、四一ウ)

「ネズ(兎)」 ネスミノミライハスシテ「ネス」トハカリイヘリ ネスナキ ネスハシリ等如何(巻四、八九ウ)

「ヅク」 「手ツ。ク。ノアル」トイヘル ツク如何(巻四、七九ウ)

「カヤスシ」 スルコトノヤスケナルヲ「カヤスシ」トイヘル カ如何(略)「カタヤス」トイヘル心モ片安也(巻二、二

三ウ)

「チト」 スクナキ物ヲ「チト」トイヘル如何(巻三、三三二オ)

「ヤクト」 下臈ノ詞ニワサト、イフヘキ所ニ「ヤクト」、イヘリ如何(略) コレヲ大事トイフ心也(巻五、四〇オ)

「ケロリ」 下臈ノ詞ニ「ケロリ」トイヘル如何(巻八、四三オ)

「ナバ(茸)」 又茸ヲ鎮西ナトニハ「ナ。ハ」トイヘリ(巻九、四六ウ)

以下には、擬声語・擬態語を挙げる。

「ドドメク」 世間ノカシカマシキラ「ト、メク」トイヘル如何 答 動々歟(巻三、二三ウ)

「サ」 「サトキタリ サトチル」ナトイヘル サ如何 コレハ風ノフクサノ心歟(巻二、五四ウ)

「グット」 「。ク。ツトノム」トイヘル クツ如何(巻五、二八ウ)

以上、名語記が「トイヘル」で引用した口頭語と見られる語群を挙げた。これらを、「梁塵秘抄の口頭語」で取上げた

語群と比べると、極めて良く通ずることが分る。一致するのは、

(一) 文法

1 代名詞 コ・ソ・ア・ド体系の使用

3 活用形の用法 (1) 連体形終止

4 形容詞の用法 (1) 語幹用法

5 助動詞 (1) 推量の「ムズ」 (3) 願望の「タシ」

6 助詞 (2) 禁止の終助詞「ソ」 (3) 終助詞「ヤラム」 (4) 持ちかけの間投助詞「ナ」 (5) 並列の「ヤ」の省略

(二) 音韻 (国語音)

1 母音の交替

2 語頭の狭母音音節の脱落

3 連母音による母音 i・e の脱落

(三) 音韻 (漢字音)

1 才段長音の合音の短呼

2 才段拗長音をウ段長音に発音

(四) 語彙

「テテ(父)」「ザコ(雑喉)」「タブ(賜)」「スハ(感動詞)」が語としても一致し、擬声語・擬態語の使用においても通ずる。

「梁塵秘抄の口頭語」を補うものには、

(一) 文法の1代名詞の「オレ」、2動詞の活用的一段活用動詞「ケル」 3活用形の用法の(2)命令形の「〜ロ」 4形容

詞の用法の(2)終止形の「〜イ」(3)カ語尾 5 助動詞の(2)完了の「タ」(4)「死ニニケリ」の用法 6 助詞の(1)副

助詞「バシ」 7 接頭辞「シヤ」

(二) 音韻(国語音)の4語頭のoの脱落 5子音kとsの交替

(三) 音韻(漢字音)の3母音oとuの交替

(四) 語彙の「ア」「ヤ」「ネズ」「ツク」「カヤスシ」「チト」「ヤクト」「ケロリ」「ナバ」
が加わる。

四、説明文の中に現れた口頭語

名語記が語源説明に取上げた語や語句の掲出の形式には、二種がある。

A 弓ライルノイ如何 イハ射ノ字也(下略)(卷二、四ウ)

十ノ字ヲトヲトモトモツカヘリ如何(卷二、一三ウ)

B 不審スル詞ニ「ト・レン」トイヘル トレ如何(卷三、二五ウ)

詞ニ「トイ ヲソイ」トイヘル トイ如何(卷三、二二ウ)

Aは、直接に語や語句を取上げる形式であり、Bは、「トイヘル」で引用した形で取上げたものである。このBの引用した形式の語に口頭語が見られたのであり、前項に取上げたのはこのBの形式のものである。名語記全体から見ると、Bも多いが、比較するならばAが多い。

AもBも掲出の語や語句であるから、「問……如何」という問答形式の「問」の部分にある。これに対して、「答〜」以下は、説明文となる。この説明文の中にも、「トイヘル」で引用された語や語句があるが、大部分は編者経尊の用語である。その説明文の語句の中にも、口頭語が現れている。それらを、前項の構成に従って掲げる。

(一) 文法

1 代名詞(コ・ソ・ア・ド体系のア系)

〔アノ〕 アノ楊貴妃ナトニヨセテイヘル詞ニモ羅綺ノ重タルヲ機婦ニネタミ(下略)(巻九、四八ウ)

アノ聖徳太子ノ十七箇條ノ憲法ニ民ヲハ冬ツカフヘシ(略)トシルサレタリ(巻一〇、一二一オ)

〔アチ〕 アチコチイテイリ ユカミマカレルハヤハラキオホキ故也(巻四、三ウ)

〔アナタ〕 ソレハ穴ノトホリタル アナタニ手ヲアツレハ 風ツヨクアタレリ 又コナタニ手ヲアツレハ又ツヨクアタル

カルカ故ニ穴ノ中ヨリオコレルニニタリ(巻四、三四ウ)

代名詞に関連して、「コレテイ」の語もある。

〔コレテイ〕 万葉ニハ香聞 可聞 麩 毳 鴨 水鳥 コレテイニ所々ニカキカヘタリ(巻四、三四オ)

2 動詞の活用

下二段活用的一段化(いわゆる擬一段化)の例がある。(傍線は筆者)

チヒサキ袋ナトニ入テラシコメルハ クサクトナル心地歎(巻八、二七ウ)

タフく如何 タ、ヘルく也(巻九、二七ウ)

3 活用形の用法(連体形終止)

連体形終止が助動詞「ケル」にある。

ワレカラ 身ヲホロホシケルトイフ心ニテワレカラトナツクル也(巻九、一六オ)

4 形容詞の用法(語幹用法)

形容詞の語幹が、語尾を附けずにそのまま用いられる例がある。

乃カ變シテのトナレル也 イマハマヘノ點ヲトオサスシテ カシラチヒサニ乃トカケルハ(巻二、三九オ)

5 助動詞

推量の「ムズ」と願望の「タシ」がある。

「ムズ」 人ノイノチ十歳ニツ、マリナラム時 ヨハツキムスル也（卷二、二五ウ）

將為也 コレヲヨマムニハマサニセムトストヨマムスレハ アラマシノ心地ニナル也（卷五、五三ウ）

イハユルウマスメ可去 家ノタエナムスル故ニ マオトコスルメ可去（卷六、一四ウ）

コレハ御氣色ヲソムカハイノチニモウセムスレハ命ノ字ヲ心トセル詞也（卷六、四七ウ）

「タシ」 サレハ帆船ノ帆ヲコソ ホトハヨマセタキニ凡ヲカキテ帆ヲホトヨマセタリ（卷二、一〇オ）

ネウトイフヘキ字ノ音ハシニテシトイヒタキ字ヲハネウトヨメリ（卷四、八五ウ）

6 助詞

助詞では、副助詞「バシ」、終助詞「ヤラム」と、並列の「ヤ」の省略、係助詞「コソ」の呼応の乱れがある。

「バシ」 文字モアヒニタルユヘ ソノ躰タカハサレハ カヨヘル義ハシノアルヘキヤラムトオモヒウタカハレ侍ヘルモ

ノ也（卷二、一〇オ）

コノ義ニヨリテ阿ラアトハシイヘル歟（卷二、五三ウ）

ソヤウヲサヤウトハシイヒナセル歟ノウタカヒモアリ（卷二、五五オ）

コレモ八十ノ義ハシ歟（卷五、三八オ）

ソノ義ニツイテ刑ヲサカト ハシ ナツケタル歟（卷九、一五オ）

「ヤラム」 マトハイハレヌルヤラムトモ存せラル、モノ也（卷二、四三ウ）

主基方ハ松ニ鶴ニ侍ヘリシヤラムトコソオホエ侍ヘレ（卷三、五二ウ）

コレ躰ノ詞ニ准シテサナエモ同風情ヤラムト ウタカヒ存スルハカリ也（卷二、五四ウ）

〔並列のヤの省略〕 又推シテ云 ミチタトル人ヤメクラナトヲ ソチユケ コチツナトイヘルニツキテ(巻五、七四ウ)

〔係助詞コソの呼応の乱れ〕 ナインフル如何 地振ハ震歟 地ノ別コソアル フルハ同義也(巻五、六四ウ)

7 カス語尾

カ行四段活用動詞の活用語尾「カ」(例えば「咲カ」など)に使役の「ス」が附いた「カス」が、一接辞のようになって、カ行以外の四段活用動詞の未然形に附いた用法がある。口頭語の要素の濃い文献には散見し、「口語的表現」の語である(13)と説かれている。

〔イヒカヨハカス〕 コレハタチツツトノ五音便宜ニヨリ イヒカヨハカサルレハ也(巻二、二七ウ)

〔イヒニコラカス〕 實ノ母ニ似スレハ マ、トハイヒニコラカセル歟(巻五、四八ウ)

〔スカマカス〕 スクナルモノヲタムル時ハ目ヲスカマカス義歟(巻八、一四六ウ)

〔オソレカス〕 ヲラカス如何 ヲレカス歟 ヲソシヤカスノ反 恐レカス也(巻九、一五ウ)

この「オソレカス」は、「カス」が下二段活用に附いたもので、「カス」の用法の拡がりを窺わせる。

(二) 音韻(国語音)

1 母音の交替

母音 e が i に交替した「サイツル」(サヘツル)の例がある。

髷カモ、イロトナク如何 モ、ヒロトナクハ百尋也 立春ノ祝言ヲサイツル也(巻九、七六オ)

2 語頭の狭母音音節の脱落

「イダス」が「ダス」となった例がある。但し、複合語の下位要素となった用法である。

ヒチハ臂モハリタシ 反リテヒチトナル張出也(巻六、七八ウ)

3 連母音による母音音節 i の脱落

「ツミイレ」が「ツミレ」となる例がある。

トヒクサノハナヤ テニツミレテヤ ミヤヘマイラムヤトウタヘリ (巻九、六一ウ)

但し、これは歌の引用である。

4 八行四段活用動詞の音便

概水 タヨリヲウシナテ 黎民 雨澤ヲシノフ月ナレハ水無月トイヘル義ノミナ月歟 (巻九、六八オ)

「ウシナテ」がこの表記の通りであるとすれば、八行四段活用動詞の促音便を無表記にした例となるが、この一例のみであるので姑く保留する。

(三) 語彙

擬声語・擬態語が次のように用いられている。

鳥ノハネヲハトイヘリ如何(略) フラノ反 フラクトトヘハ也 (巻二、六オ)

風ノハトフク ハ如何 フハノ反ハハ也 フハクトフク也 (巻二、七ウ)

以上の、説明文の中に用いられた口頭語を、前項の「トイヘル」で引用された口頭語と比較すると、質的に同じであることが分る。ただ、仔細に見ると、説明文の中の口頭語の方が、種類も量も少ないことが分る。これは、説明文の文体の基調が文章語の規範によっていることに係っている。口頭語はその基調の文体の中で部分的に現れたと考えられる。この説明文の中における口頭語の現れ方は、同じ鎌倉時代の口頭語資料に口頭語が現れるのに通ずる。当時は、口頭語資料といっても、現代語のような話す言葉をそのまま文字化したものではないことが知られるのである。

注

- (1) 拙稿「鎌倉時代語研究の課題」(鎌倉時代語研究第十輯、昭和六十二年五月)。
- (2) 拙稿「鎌倉時代の口頭語の研究資料について」(鎌倉時代語研究第十一輯、昭和六十三年八月)。
- (3) 拙稿「和化漢文における口頭語資料の認定」(鎌倉時代語研究第十二輯、平成元年七月)。
- (4) 小林芳規他編『梁塵秘抄・閑吟集・狂言歌謡』(新日本古典文学大系第五十六巻、岩波書店、平成五年六月刊)の小林執筆解説。
- (5) 注(4)文献に附載。
- (6) 岡田希雄「鎌倉期の語原辞書名語記十帖に就いて」(名語記所見の鎌倉時代語)(勉誠社刊『名語記』附載論文)。
- (7) ここに引用の「トイヘル」は、言葉を口にするが、世間で話しているがの意の場合である。この意味で用いた「ト申ス」等も含めた。名語記には、他に「コレハタメニトイフ心」(巻二、二八才)のように、提示された事柄をとりたて述べる、形式化した用法があるが、この用法のものは取上げていない。
- (8) 注(4)文献。
- (9) 例えば、
 ○人躰ノクヒノト如何 ノトハ喉トツクレリ 飲戸ノ義歟 クハシクハノム戸トイフヘキ歟(巻五、一四才)
 ○ミスヲ マキアケテモタスル物ヲコトナツク如何 御簾ノコハ鈎也 コウトイフヘキヲコトイヘル也(巻三、四九ウ)
 の如く、院政鎌倉時代には、「ノムト」は古辞書や訓点資料に見られる文章語であるのに対して、「ノト」は角筆文献など口頭語資料に見られる。又、「鈎」の音は字音仮名遣では「コウ」であるが、口頭語では「コ」とオ段長音の短呼が行われている(音韻(漢字音)の項参照)。次の例も同種である。
 下臈ノ「キト」、イフヘキヲ「スト」、イヘル如何(巻六、九八才)
 佐藤喜代治「文章研究の意義と方法」(国語学第二十五輯、昭和三十一年七月)。
- (11) 拙著『角筆文献の国語学的研究』研究篇七七四頁以下。
- (12) 高松政雄「オ段拗長音の一問題」(国語学八十三集、昭和四十五年十二月)。
- (13) 吉田金彦「口語的表現の語彙―かす」(国語国文二十八巻四号)。